小説 089タロー
挿絵 桃月すず
YOME ANE
嫁姉ッ!
お姉ちゃんの愛情は無限大!
弟とだったら子作りもOK!
立ち読み版

序章　お姉ちゃんは花嫁修業中！　006
一章　お姉ちゃんのヒミツの本気！　023
二章　お姉ちゃんのヤキモチ修行！　076
三章　お姉ちゃんにお仕置き中！　117
四章　お姉ちゃんとラブラブ中！　でも……　163
五章　お姉ちゃんたちとラブラブ子作り！　185
終章　お姉ちゃんたちは僕だけの姉嫁ッ！　243

登場人物紹介

Characters

逸見愛華（いつみあいか）

グータラでよく弟をからかって楽しんでいる、ちょっとエッチで小悪魔的な長女。

逸見桜子（いつみさくらこ）

運動全般が得意で特に剣道は凄腕の持ち主。反面、不器用で家事全般が壊滅的に下手な次女。

逸見加奈子（いつみかなこ）

いつも物静かで一見冷たい印象を与えがちだが、内面は献身的で寂しがり屋の三女。

逸見弘行（いつみひろゆき）

一人暮らしをしていたおかげで、家事全般をそつなくこなせるようになった末弟。

三章　お姉ちゃんにお仕置き中！

「見てくれヒロ！　やった、やったぞ、見事なゆで卵ができた！」
それはとある日曜日だった。まだ七時前の早朝、荒れた庭の手入れをしていると、大声と共にドタドタと足音が聞こえてきた。
「しっ！　桜子姉さん声が大きいよ。ご近所の人はまだ寝てるかもしれないんだから」
「あ、済まない、つい。だが見ろ！　かんっっぺきなゆで卵だ。爆ぜてもいないしどろどろでもないし殻を剥くとき潰してもいない。我ながら惚れ惚れする出来だ！」
Ｔシャツにスパッツという私服の上にエプロンを着る次女な姉は、ポニーテールをぴょこぴょこ揺すって会心の笑みを浮かべてみせた。
「おお、どれどれ……うん、上手くできてる。やったね姉さん」
「そうだろう！　うむ、修練に勝る才能なし、わたしだってやればできるのだ！」
たかがゆで卵、されどゆで卵。不器用な桜子にとっては本当に珍しい成功例なのだ。
「はふ、ねむ……も～うるさいな～、なんなのよ一体？」
「おお愛華ネエ、見てくれこれを、わたしが作ったゆで卵だ！　どうだ、よくできているだろう？」
洗濯籠を気だるげに振りながら愛華が寝ぼけ眼をこすってやってくる。エプロンこそ着

てはいるものの、その下は裸ワイシャツという谷間もあらわな寝間着姿だった。
「あ、愛華姉さん、またそんな格好でっ……人が見てたらどうするの！」
「なによ～人が真面目に洗濯干そうってのに。それにほんとは、う・れ・し・い、クセに」
「うっ、そ、そんなことは……もうっ！」
「むふふ、カワイ～ね～弘行は。んで、どれどれ～……」
照れる弟を軽くイジると愛華は白いゆで卵を眺めた。
「へ～、それなりじゃない。桜が作ったとは思えないレベルね」
「だろう？　ふふん、いつまでも愛華ネエたちに負けたままだと思うな」
桜子にいわれて愛華はちょっと目を丸くした。実力を隠していたことがバレていたので驚いたらしい。そういった洞察力は男にはなく、やはり桜子も一人の女性なのだと分かる。
「ふ～ん、そう。へ～」
「そうだ。ふふ、これはヒロに上手い飯を出せる日も近いな。おおそうだ、今のうちに献立を考えておかねば」
「そうね～できるといいわね～。もっとも、一つ作るのにいくつ卵がお釈迦（しゃか）になるか分からないけどね～？」
「うっ？　み、見たのか愛華ネエっ！」
「卵の殻がキッチンにたんまり捨ててあったわよ。一個じゃあんなに出ないわよね～？」
「んぐぐ、ぬかった……！」

……どうやら結構な数の卵が犠牲となっていたらしい。鶏さんごめんなさいと弘行は内心頭を下げた。

悔しげに呻く桜子を愛華はニヤニヤしながら覗き込む。

「ま、姉に勝てる妹なんていないのよ。せっかくの休みだし大好きな剣道やってれば～？」

「うるさいっ！　わたしはヒロと約束したのだ、必ず立派な女になってヒロの……姉に相応しくなると」

桜子のほうも負けるつもりはないようだった。エプロンとTシャツを押し上げる胸をグンと張って姉を笑う。

「愛華ネエこそ、少しは花嫁修業に励んだらどうだ？　いくら実力があっても使わなければ無用の長物。まあ、寝坊ばかりの女など、そもそも貰い手がいないだろうがな」

「！　へ～、不器用なクセにいうじゃない」

愛華も珍しく半眼になって片方の眉をはね上げる。妹に見せつけるよう、自慢の巨乳をグイと押し出す。

「ちっさい胸張って威張るんじゃないわよ。ちょっと前までブラも着けなかったクセに」

「ふん！　わたしの乳とて負けていないぞ。ヒロはとても気に入ってくれた！」

「えっ？　ま、まさか、アンタ……！」

「ふふん、この乳にヒロはいっぱい甘えてくれたぞ。す、すっ、好きだといって、お、押し倒してくれたっ。花嫁としてこれに勝る悦びはあるまい！」

「妹のクセにナマイキっ……でもね、弘行、リードしてくれたでしょ？　当然よね～、お姉ちゃんが優しくチェリーを食べてあげたんだから」
「な、なにっ⁉　おのれ愛華ネエ、未熟な弟を手篭めにしようなんて！」
「桜だってヤったんでしょうに！」
「愛情の末の合意の結果だ！」
「ちょ、ちょっと二人ともぉ！」
二人とも意地になってイケナイことまで自慢しあう。外で誰かが聞いていやしないかと弘行は大いに肝を冷やした。
慌てて少年が止めに入ると、二人は揃ってズイッと覗き込んでくる。
「ね～弘行、お姉ちゃんのほうが気持ちよかったわよね～？　あんなにいっぱい中出ししたんだもん、最高よね～？」
「わたしの胎でも果ててくれたぞ！　ああ、それはもう気持ちよさそうにだ。そうだろうヒロ？　お姉ちゃんとのまぐわいは素敵だっただろう？」
「い、いや、あの……！」
（そりゃ、どっちも素敵だったけど……どう答えたらいいのさ！）
まさか美人な姉二人に板ばさみされる日が来るとは思わなかった。弘行としては甲乙つけ難く、どちらも大好きだとしかいえない。
しかし対抗心に火の点いた二人は、互いをライバルと認識して弟の気を引こうとする。

「くす、分かってるのよ。お姉ちゃんの見えそうなおっぱい、さっきから気になって仕方ないんでしょ？」
　愛華はそういって流し目を作ると、白いエプロンの上だけを外し、今にもこぼれ出んばかりだったワイシャツの際どい胸元に手を伸ばす。
「いいのよ見ても。なんだったらあのときみたいに思い切りモミモミしちゃえば？」
「あ、愛華姉さん、そんな……ああっ」
　細い指先が襟を開くと、たゆんっ、と一つ大きく揺れて二つの果実がまろび出てきた。
　淡雪のような白さを誇ったメロンほどもあるたわわな丸み。その圧倒的な豊満さと弾むように揺れる肉感に、少年は自然と目を奪われる。
（やっぱり愛華姉さんの大きいっ！　ああ、揉み応えありそうでまた触りたく……）
　大きな乳房に男は憧れがちである。少なくとも弘行は大好きだ。そして愛華の大きな乳房は、丸い形とたるみのない張りが実に美しく魅惑的だった。
　と、少年が思わず見惚れてしまうと、桜子までムッとしてシャツを捲り上げる。
「わ、わたしのだって……見てくれヒロ、お前が好きだといってくれた乳だ！　思うまま触ってくれていいのだぞ」
「桜子姉さんまで、ああ……こっちも、大きい……！」
　盛大に揺れてまろび出たのはやはり白くてなめらかな巨乳だ。けれどこちらは愛華のものより揺れが大きく、その柔らかな質感の違いがはっきり見て取れた。

そして二人は、弟の所有権を争うように乳房を身体に押し付けてくる。
「ほら弘行ぃ、お姉ちゃんのおっぱい味わっちゃいなさい」
「いいやヒロ、わたしの乳を堪能してくれ。大きさは愛華ネエに負けるが、なに、ヒロが愛でてくれるのならばそんなことなどどうでもいい」
二人の巨乳が左右から脇を挟みこんでくる。自身も薄着だったため、その暖かさとたっぷりの肉感がかなりしっかり伝わってくる。
（ああヤバイ、どっちかなんて選べないよ。どっちも魅力的すぎる。でもマズイよ、塀の向こうでは人が通るかもしれないってのに）
元より大した庭ではないし塀も薄い質素なもの。声などは普通に聞こえてしまうし喘げば簡単にバレるだろう。
にもかかわらず、ついつい欲情し勃起してしまった少年、その立派に張ったテントに気付いて愛華は跪きズボンを下ろす。
「わぉ、朝から元気元気。じゃ、コッチに訊いてみよっかな～？　どっちが素敵なおっぱいかって」
そういって笑うと、愛華は何と乳房を持ち上げペニスをぱっくりと谷間に挟んだ。
姉さんっ⁉　と驚く弟を面白がるように見上げて、乳肉で擦り込む。
「くす、こ～んな巨乳のお姉ちゃんだもん、一度はパイズリしてみたかったでしょ？　ほら、してあげる。んっ、お姉ちゃんだってほんとは……してあげたかったんだゾ？」

挑発的な笑顔の中には、けれどちょっぴり照れ臭そうな初々しい恥じらいがあった。眉をハの字にしてはにかむと、愛華はツバをトロリと垂らして谷間を濡らしてから動いてくれる。

――むにゅるるっ。ぬちゅっ、ぬちょっぬちょっ、たぷっ、たぷぷっ……。

「あぁ、すごっ……あ、愛華、姉さん……」

濡れた乳肉に勃起を擦られて少年はすぐにも腰を震わす。突然のことに自制が利かず、むっちりとした柔肉の感触に勃起神経がたちまち陶酔させられる。

しかもそれを見た桜子までが、負けてられぬと鼻息を荒くして同じく跪き乳房を寄せる。

「ぬぅ、ち、乳で男根をしごくとは、なんという妙技……しかし負けん、わたしとてそれくらいやってみせる！　ん、ほら、どうだヒロ？　わたしの乳は気持ちいいか？」

「ああ桜子姉さんまでっ……はぁぁ、ふかふかしてて、柔らかい……！」

「ちょっと桜、これわたしのっ……このっ、Fカップしかないクセにぃっ！」

隣の姉を押し退けるようにして桜子は強引に乳房を押し付ける。愛華も負けじと押し合いながらたっぷりと根元から乳肉で挟みこむ。

庭で立ち尽くす弟少年は、姉の四つの巨乳たちに左右からペニスを挟みこまれていた。

「んんっ……ど、どうだヒロ、感じるか、お姉ちゃんの乳？　ほら、いっぱい動かしてしごいてやるぞ？」

「このっ、わたしが先だってのにっ。ね～弘行、お姉ちゃんのおっぱいのほうが断然いい

わよね～？　ほら、もっとヌルヌルにしてこすってあげちゃうゾ？」
対抗意識に燃える二人は、我先に愛弟をイカさんとばかりに乳房で押し合い激しく動く。
そのはち切れんばかりの弾力感と纏わりつくような柔らかさの狭間で、少年はただどちらも選べずうっとりとペニスをヒクつかせるばかりだ。
（ほんとに、どっちも気持ちいいっ！　愛華姉さんのはぷるんぷるんでぬるぬる滑って感じちゃうし、桜子姉さんのは柔らかくってもちもちしてて吸い付くみたいだっ！）
姉妹でありながら二人の乳房は対照的だった。愛華の巨乳は瑞々しい張りと弾力に富み、桜子の巨乳は柔軟性に優れている。だが勃起神経にとってはどちらも甘く心地よい感触で、それらを同時に堪能するのはまた極上の愉悦だった。
おかげで少年は立ち尽くしたまま息を弾ませ喘いでしまう。
「はぁ、あぁっ、だめ、も、もう、出ちゃう……！」
「はぁぁ……くす、お姉ちゃんのでイキそうなのよね？　あん、ほらぁ……もっと強く挟んであげちゃう。弘行の感じやすいトコ、先っちょの部分もいっぱいこすって……」
「いいやお姉ちゃんのでだっ！　さあヒロ、大好きな乳でたくさん出してくれ。あぁなぜだろう？　ヒロのイチモツをしごいてるだけで、なんだかわたしも……胸が、切なく……」
なおも取り合いを続ける二人は、びくびくと脈打つ雄々しいペニスに恍惚の眼差しで見入っていた。
つやっぽく潤んだ乙女らの眼差しが長い睫毛に煙って煌めき、淡く色付いたなめらかな

「いやぁ、いや、いわないで、ヒロくぅん……」
姉の痴態を目の当たりにして少年の欲望は限界まで募っていた。もはや後には引けぬと感じ、お仕置きモードのままちょっとだけイジワルする。
「お仕置きされてイっちゃったんだよね？　可愛くてエッチな加奈子姉さん。でも、そんな姉さんが、僕は……」
――大好きだから。そう囁いて、ぐったりした彼女の唇にそっと自分のそれを重ねた。
不意打ちのキスに驚いた加奈子は、けれどすぐに瞳を閉じて柔らかい唇を押し付けてくれる。
「んん、ヒロ、くん……お姉ちゃんも好き。大好き……ごめんね、だめなお姉ちゃんで。弟くんに恋しちゃうお姉ちゃんで……」
「いいんだよ。僕も――おんなじだから。姉さんにときめいちゃう弟だから」
そう。いけないと思ってはいたが、本当は姉たちに恋していた。
だらしないしやる気もないが、本当は優秀で弟想いな愛華。不器用で凛々しくできないが、本当は可愛らしい桜子。そして一途に弟を想い嫉妬で泣いてしまうピュアな加奈子。そんな彼女らが本当は大好きで、だからこそ実家を離れ想いをごまかそうとしたのだ。
だが、姉たちの本音を見て弟としての理性は崩れていった。今ではもう、一人の女の子として愛おしい。
「加奈子姉さん……最後までして、いい？」

羞恥と快楽に涙した瞳を真っ直ぐに見て少年はいう。
「……うん。して。カナの、お姉ちゃんのバージン、ヒロくんにあげたい……」
長い髪の美しい乙女も切なげに頷いてくれた。
もう、お互いの想いを止められはしない――そう確信し、少年はズボンとパンツを脱いで愛しい姉にゆっくりと迫る。
ベッドの上に仰向けに寝かせ両足の膝を曲げて開くと、なおも恥じらう可愛い少女、その捲れ上がったスカートの奥のむき出しの花弁に先端を添える。
「ヒロくんの、ぉ、大きい……ちっちゃい頃と、全然違う……」
「加奈子姉さんだって違う。すごく、綺麗になった。おま〇こもこんなにぐしょぐしょでエッチだ……」
「うん……ごめんなさい、エッチなお姉ちゃんで……」
小声で謝る姉が可愛くて少年は微笑みキスをした。唾液を少し交換すると、狙いを定めて腰を進める。
「はぅっ、あぁ……ヒロくんのが、お、お姉ちゃんに……！」
「ごめん、少し痛いだろうけど、我慢して……」
「大丈夫っ、お姉ちゃんがんばるから、きて……ああっ！」
許しを得た少年は、処女な姉を苦しませぬよう丁寧に、しかし力強く勃起を押し込んだ。
濡れた入り口が押し広げられエラ部分までペニスが入る。そこに待っていたのは、儚く

も異物を遮ろうとする彼女の大切な純潔の証。
「はぁ、はぁ、い、いいの、ヒロくん、きて、きてぇ……っ」
処女喪失の予感に姉は震える。でも懸命にこらえて愛弟を求める。羞恥をこらえて必死に足を開いてみせた。
そんな彼女を心底愛おしく想いながら、少年は腰をもう一息、押し込んだ。
——ずぷぷっ、ぶつっ……！
「はぐっ……あ、ふぅ……っっ！」
純潔の証が突破されて一筋の鮮血と共に消える。
三人の姉の最後の一人、加奈子のバージンまでもが弟に捧げられたのだ。
「入ったよ加奈子姉さん。大丈夫？　無理しちゃだめだよ？」
唇を噛み眉根を寄せて加奈子は破瓜の苦痛に耐えていた。痛みに強くない彼女の目には、快楽とは別の涙の雫が浮かんでいた。
だがそれでも——少年が心配し覗き込むと、懸命に笑顔で応えてくれていた。
「はぁ……はぁ……大丈夫。カナ、嬉しい……ほんとに、ヒロくんと一つになれた……ヒロくんだけの女の子になれたんだね。それだけでお姉ちゃん、最高に幸せ……！」
涙でいっぱいのその眼差しには本気の恋慕が満ち溢れていた。苦痛すら愛情の証とばかりに両足を絡めてニコッと笑う。
家族ですら滅多に見れないひまわりのような眩い笑顔。その悦びに満ちたピュアな表情

に少年は胸を熱くさせられる。
「僕も嬉しいよ、加奈子姉さんと一つになれて。それに、くっ、姉さんの中、すごい狭くて気持ちいいっ……！」
入れて間もないのに弘行は快楽に呻いてしまった。
加奈子の中はとても窮屈で締め付け具合が半端なかった。しかもヒダはザラザラしていて細かい突起が深くペニスに密着してくる。男を高めるためだけにあるような刺激的すぎる蜜壷の感触に、敏感な勃起粘膜はすぐにも悦び悶え始めていた。
これでは彼女が納得する前に一人だけ果ててしまう。そう思って少年は動かず待とうとしたが、加奈子は軽く腰を揺すって早くも抽送をおねだりしてきた。
「ほんと？　ヒロくん悦んでくれる？　ああ、嬉しいっ……いいよ、もっと気持ちよくなって。んっ、カナのアソコ、ヒロくんの……あっ、旦那さま専用にして……」
思わぬ刺激に少年はううっ、と小さく呻く。ザラザラとした膣粘膜がサオを早速しごいてくる。
どうやら加奈子は愛弟の快楽を一番に考えているらしい。自分が感じてイこうなどとは思っていないのだ。
そして悦んでもらえることにこそ幸せを感じているらしかった。
「はぁはぁ、ああヒロくん、お、おちんちん、びくびくしてる……感じる、ヒロくんが感じてるのを……お願い、もっと、もっともっとカナを感じて……！」

涙の雫が伝う頬には甘やかな微笑みが浮かんでいる。時折苦痛に眉根が寄るが、高まる快楽に震える少年を愛情たっぷりに見つめ続ける。

まさに献身を絵に描いたような一途で可憐で美しい乙女。そんな姿を目にして、少年は燃え上がらずにはいられなかった。

「っ……姉さん、加奈子姉さんっ……！」

「はううっ、ヒロくぅぅん……っ！」

――ずぷっ、ずぷっ、ちゅぷっちゅぷっ、くちゅくちゅ……。

高まる愛欲を抑えきれずに、少年はゆっくりと勃起を出し入れしていった。

無論その動きには深い思いやりも含まれている。初めての彼女を苦しめないよう振り幅は小さく激しくもしない。ザラザラ粘膜の気持ちよさに本当はすぐにも果てたくはあるが、射精感をぐっとこらえて優しく膣肉を開発していく。

そんな弟の愛情ピストンが乙女の性感に響くのか――いつしか加奈子の細いくびれが、どこか切なげな身動ぎを始めていた。

「はぁ……はぁ……あぁ、ヒロくんの、おちんちん……ぁ、熱い……カナの中で、どんどん、膨らんできてぇ……」

潤みきった少女の眼差しに陶酔の色が混ざり始めた。息が弾んで吐息は湿り、愛情ピストンの動きに倣ってそっとラビアを押し付ける。

まるで早くも感じ始めて肉棒に惚れ込んできているような――どこか艶めかしい恍惚の

表情。その蕩け始めた瞳には、乙女心の昂りだけでない隠しきれない官能の色があった。
「はぁ……あぁ……あふ、すごい……腰、じんじん、しちゃぅ……！」
「ああ加奈子姉さん、もう、感じてきてるんだね？　なんていやらしい女の子なんだ……」
「はぁ、はぁ、っ……ごめん、なさぃ……」
行為にうっとりと身を任せながら加奈子は小声で謝った。
実のところ、挿入してからまだ間もない。彼女の好意に甘えてしまっていた形だ。だが緩いストロークだけでも、加奈子の性感は確実に目覚め男根に馴染んできたようだった。
（愛華姉さんや桜子姉さんもここまで早くなかったのに。もしかして加奈子姉さんって、感じやすい？）
何せスパンキングで濡れてしまうのだ。Mっ気があるのなら破瓜の苦痛にすら快楽を見出すかもしれない。すぐに自分から動けたのも、それが理由かもしれない。
（これなら僕がイクより先にイカせてあげられるかも）
加奈子の膣内は刺激的すぎて正直すぐにもイってしまいそうだ。だがそれでは不甲斐ない。ちゃんと彼女もイカせてあげたい。そう願う少年は、もう一度姉を責めることにした。
「……姉さん、胸、見せて」
「えっ？　あの、でも……カナ、胸ちっちゃいし……」
「でも見たいんだ。加奈子姉さんの全部が見たい」
戸惑う彼女に優しく迫ると少年はワンピースの肩紐を下ろした。

中にあったのはパンティとお揃いの黒いブラだった。思えば白い生地には、黒っぽいものが見えていた気がする。
「ちょっと透けて見えちゃってたね。アダルトな下着が好きなの？」
ちょっとイジワルく訊ねると、加奈子は恥ずかしげに目を逸らした。
「っ……ひ、ヒロくんが……す、好き、かなって……」
スタイルのいい姉たちへのささやかな対抗策だったのだろう。大人しい彼女が普段からこんな下着を着けているはずがないのだ。
そんな彼女がいじらしく思えて少年は素敵だよ、と囁いてあげる。すると彼女は目を丸くし、次いで睫毛を震わせた。
「嬉しい……カナ、がんばってよかった……あぁ、ヒロ、くぅん……」
――ぱわっ、ぷるるっ。
加奈子なりの色気アピールを無下にすることなどできはしない。ブラを脱がすのではなく、上にずらしてその中身を見せてもらった。
「これが加奈子姉さんの……すごく綺麗だ。ぜんぜん小さくない。素敵なおっぱいだよ」
「ひ、ヒロくん、はぁぁ……い、いっぱい、見てるぅ……」
白い膨らみをじっくりと見て少年は素直に褒めていた。
加奈子の乳房は確かに姉たちと比べれば小振りだ。だが決して薄いわけではなく、掌サイズの適度な脂肪が綺麗なお椀型を作っている。乳輪も小さめで色もピンク、瑞々しさと

張りもあって少しも見劣りするものではなかった。
　むしろ片手に収まるもので見るからに揉みやすそうですらある。事実、少年がそっと両手を伸ばして両方一緒にやわやわと揉むと、何とも快い熱感と柔らかさが隅々まで堪能できていた。
「はぅ……だめぇ、そんな、や、優しく揉んじゃ、カナ……」
「姉さんのおっぱい、ぷりぷりしてて気持ちいい。ほら見て、乳首立ってるよ」
「はううっ⁉　ヒロくんらめぇ、摘んじゃ、あふっ、しごいちゃ、やぁ……ん」
　こういうところはやはり姉妹だからなのか。姉たちと同様、加奈子もまた胸は弱いようだった。
　けれど今の弘行は、再び責めのモードに入っている。やんわりと揉みしだくその手を浮かせ指腹でそっと乳首に触ると、意表を突くように突起を摘んでクイッと上に引っ張った。
「あふうんっ⁉　ひぁ、らめヒロくぅんっ！　引っ張っちゃ、乳首そんなしちゃ……！」
　途端に加奈子は声を高くして肩をびくびくと震わせた。ふるふると首を左右に振る。透明な涙がパッと散ってシーツに小さなシミを作った。
　それでも少年は離してあげず、摘んだ乳首を緩く捻ってみせる。すると加奈子はおとがいを逸らし、口から舌を溢れさせた。
「ひいいんっ⁉　らぁ、らめぇ……カナ、壊れちゃうぅ……お、おっぱいじんじんして、頭、真っ白にぃ……！」

「でも、気持ちいいんだよね？　だよね姉さん、だっておま○こびくびくしてる……！」
やるときはさすがに心配もしたがどうやら杞憂に終わったようだ。少し痛めの刺激を受けて、加奈子はますます感じているようだった。
その証拠に、さらに乳首を捻ってあげるときゃんっ！　と鳴いて腰をくねらせた。一瞬苦痛に歪む目元も、次の瞬間にはトロンと蕩けて淫らな表情を見せてくれる。
そう。やはり加奈子はM気質だったのだ。
「こんな風にされて悦ぶなんて。姉さん、なんてエッチなんだ。ああっ、おま○こもどんどん締まってきてっ」
「はあっはあっ、ごめ、なさぃ……カナ、痛いのに、気持ちよく、なっちゃってぇ……！」
「いけない姉さんだね。そんな姉さんには、激しくしちゃうからねっ！」
「は、はいぃ、お、お仕置きエッチ、お願いしますぅ――ひいっ、はひいいんんっっ！」
――ずぷぷうっ！　ぐっちゅぐっちゅぱんぱんぱんっ！
ついに始まったラストスパートに加奈子は歓喜の悲鳴をあげた。
弘行はもう躊躇わなかった。Mな彼女はすでに感じて腰をのたうたせよがっている。大人しい姿はそこにはなく、情熱の責めと微苦痛によってひたすら蕩けていくばかりだった。
「はあ、はあ、ああ姉さんっ、どんどんいやらしい顔になって……くっ、おま○こもすごいことにぃっ……！」
「はあっはあっごめんなさいぃ、カナ、感じちゃって、イキそぉになって、ヒロくんます

「……うん。惚れ直しちゃった」
「みたいね～。も～おちんぽ復活させちゃって」
「ご、ごめん。つい」
「くす。可愛いヤツ」
照れる弟を笑う姉だがその眼差しには幸せそうな光があった。
その輝きは、どこか母性的で見ていて安心させられる。男の持つ母性への憧れを満たしてくれるような光だ。
そんな姉を見ていると、いかに自分が彼女に支えられてきたのか思い知らされる。面倒をかけられつつも、その明るさと密かな優しさに心がずっと支えられてきた。
「どうする？　せっかくだし、も～一発ヤっとく？」
「……うん。もう一回、お願い」
「くす、エロに目覚めちゃって、このこの」
今もノリのいい姉を演じて気負わないようにしてくれている。今なら分かるその思いやりに改めて胸が熱くなりそうだ。
（僕ってこんなに節操なかったかな？　でもしたい。妊娠してでも一緒にいてくれる姉さんと、ずっと愛しあっていたい！）
こみ上げる感情に自分自身で驚きつつ、少年は再び身体を重ねる。姉もまたクスリと笑い、腰を揺すって挑発までしてくれた。

が、しかし――。

「～～～愛華ネエぇっ！　おのれわたしたちがいない間に、なにをヒロを独占している！」

しまった、という表情で二人は庭先を見やった。そこではスイカを抱えた桜子と加奈子が、目を逆三角形にして立っていた。

「むむむ、せっかくヒロにも食わせてやらねばと大急ぎで買ってこれば、まさか二人して縁側で大胆にもっ――卑怯だぞ愛華ネエ！　ヒロを愛するのは自分だけではないぞ！」

握った拳をワナワナさせて桜子は愛華に詰め寄った。

「――愛華ネエ、いつも隠れてヒロくん可愛がって。カナだって、いっぱいヒロくんと……ら、ラブラブしたいのに……！」

加奈子もさすがに腹に据えかねたようだ。細い声音に剣呑なものを混ぜてくる。

ちょっとマズイと思ったらしく、愛華は乾いた苦笑いを浮かべた。普段大人しいだけに本気で怒った加奈子は怖い。おかしな自演でも見られたように、誰もがやらない無謀な仕返しも辞さないのだ。

そして弁明は、怒った二人を別の意味で焚き付けることとなった。

「あ～これにはワケがあってさ。弘行が嫁に行かせたくないっていうから、お姉ちゃんがこうして子作りなんかを……」

「こっ、子作りっ!?」

仰天する二人に愛華は簡潔に説明した。父からの連絡と弘行の悩み、そして二人で導き

出した子作りによる解決策。それらをかい摘んで説明する（弟の一方的な恋心に仕方ないから応えてやったと脚色されてしまったが）。

聞いた二人は、愛華の誇張なのではと疑った（違うとも言い切れないが）。しかし、恥じらいながらも弘行が首肯すると、信じざるをえなかった。

「ごめん。僕が姉さんたちを好きなばっかりに。だめな弟で、ごめん……」

「ヒロ……そんなことあるものか。その……嬉しいぞ。わたしたちを自分の嫁にしたいだなんて。おまけにこっ、子作りまで……」

「カナも嬉しい。だって……カナの夢は、ヒロくんのお嫁さんになることだもん。いっぱいヒロくんに尽くしてあげて、いっぱい仲良くして、いっぱい……ぁ、赤ちゃん、産んであげて……」

自分たちも想われてると知り、二人は感激して擦り寄った。さりげなく愛華を押し退けると、ほとんど裸な弟少年の左右に座って顔を近づける。

「ふふ、やっぱりわたしたちはだめな姉だな。弟にこうまで惚れてしまうなんて。こんな姉では他所に嫁いでもろくなことにはなるまい」

桜子は苦笑し照れ臭そうに目を閉じた。そっと唇を突き出してキス待ち顔になる。

「うん。だめなお姉ちゃんたちだから、ずっと……ヒロくんに傍にいてもらわないと」

加奈子もまたキス待ち顔になった。切なげに震える睫毛が本気っぽくて愛らしい。

「「だから……お姉ちゃんたちを、もらってください」」

さすがの姉妹らしさを見せて二人の声が綺麗にハモった。
聞いた少年は、胸を熱くして二人同時にキスをしていた。
「姉さんっ……！　うん、もらうよ、みんな僕がもらっちゃう……！」
「んあんっ、嬉しいぃ……！」
三つの頭が集まって中央で唇を寄せ合った。雛鳥がエサを催促するよう互いの唇をちゅぷちゅぷと吸い、目いっぱい舌を伸ばして三人でねちっこく絡めあった。
たちまち唾液でべったりしてくる三人の頬。少年は勢いのまま、姉二人を強く抱き寄せキスをしながら胸元に手を這わす。
「ぁ、ヒロくん……して、くれるの？　お嫁さんなお姉ちゃんに、こ、子作り……」
「うん、しちゃう。みんな大好きなんだ、今日も、危険日も、いっぱい中出しして孕ませたい……！」
「ふふ、それはよかった」
襟に手を入れられながら桜子が照れ臭そうに笑う。
「実は……今日なのだ。その、危険日。今日はだめだと思っていたのだが、ヒロが、こ、子作りしたいというのなら……拒むわけにはいかないな。うむ、妻が夫の子を求めぬなどあってはならぬことだからな」
「カナだって！　そ、そろそろ、危ない日だもん。ううん、きっとその日。ヒロくんに出してもらえたら、カナの卵子、嬉しくって結婚しちゃう……！」

同じく乳房を揉まれながら加奈子は弟の胸に縋る。
まったく異なるタイプの二人だが弟を愛する気持ちは一緒。どちらも彼に熱く抱かれて妊娠による本物の妻化を望んでいる。
そして。
「よっし、決まりね。今日ここでみ～んなまとめて孕んじゃうの。で、見合い話もなしってコトで」
同じく弟を愛する姉、愛華の言葉で決定した。二人も決意の表情で頷き、夫な弟に優しく迫る。
「それじゃ、まずは前戯ってコトで。花嫁なんだもの、可愛い夫をギンギンにしてから種付けおねだりしないとね？」
いって愛華は弘行を縁側に立たせると、脱げかけの浴衣を奪って全裸にした。
「は、恥ずかしいよ姉さん」
「なにいってるのよ、こっちなんておっぱいもおま○こも丸出しなのよ？　みんな花火に夢中だし、他人の庭なんて覗いたりしないって」
弟の反応に気をよくしたのか愛華の瞳がキラリと光る。妖しく微笑んで跪くと、目の前にある彼のペニス、その下にある二つの玉に唇を寄せてはむっ、と咥えた。
「うわっ、ね、姉さん、そんな、タマなんて……あぁ……！」
「んふ、おいひぃ……じゅる、気持ちよさそうにころころしてる。感じてるんでしょ？」

恥ずかしいが彼女のいうとおりだった。射精直後の緩んだ睾丸に唇と舌の感触は快く、ぬるぬるとした柔らかな肉が這い回るたびに両足が震えた。

「くっ、愛華ネエめ、またヒロを独占する気か！」

「くすす、悔しかったら振り向かせてみなさい。アンタたちも花嫁だろうけどヒロの正妻はわ・た・し。だってもうデキちゃったもん。子宮にビビってキたもんね」

妹たちに差をつけるように愛華は色っぽく笑って舐める。片方の玉を掌に乗せて下からゆっくりと付け根に向けて。その妖艶な動きと熱く濡れた舌の感触に、少年の睾丸は羞恥と興奮のない交ぜになった奇妙な快感を見出していた。

だが、そんなものを見せつけられては黙っていられるはずもない。桜子と加奈子は見合って頷き、負けるものかと弟に擦り寄った。

「わたしたちもヒロを楽しませてやれる！　これまでの花嫁修業の成果、見せてやろう」

桜子は少年の前に来ると、愛華の隣に割り込むようにして強引に胸元を押し込んだ。

次いで襟をさっと開き、白い鎖骨と肩も悩ましいノーブラの巨乳を披露する。

「ひ、ヒロは、わたしの乳が好きなのだろう？　さあ、今宵も挟んでこすってやるぞ。この前みたいに思う存分楽しんでくれ」

「ああ、桜子姉さん、また、おっぱいで……はぁ……」

――むにゅっ、たぷぷんっ。

メロンサイズのたわわな果実に、そそり立つ肉棒が左右から挟みこまれていた。

「ふふ、こんなに熱くして。逞しくていやらしいイチモツだな。でも大丈夫、お姉ちゃんは愛しているぞ。さあ、優しく優しくしごいてやるから……」
照れ臭そうに微笑みながら桜子は身体を動かし始めた。白い両手を乳房に添えて持ち上げるように谷間を締めて、暖かな胸の柔脂肪をゆっくりとゆっくりと肉棒に擦り付ける。
以前も似たことをこの庭でしたが、その丁寧かつスムーズな動きは以前より格段に上手くなっていた。
「桜子姉さん、お、おっぱい、柔らかい……ああ上手っ、おっぱい交互に揺するなんて」
「んっ、ふふ、日々の訓練は伊達ではないのだ。ほら、こうするともっと気持ちいいのだろう？　――はむっ、じゅずるっ！」
「おおっ！　す、すごい、パイズリフェラ、なんてぇ……っ！」
何と桜子はパイズリしながら、真っ赤に腫れたカリをぱっくりと頬張ってみせていた。
思えば彼女だけがこの二つを経験している。その甲斐あってか、カリ首を唇でしごく手際も乳肉をサオに絡める仕草も実になめらかなものだった。
「れる、はむっ……へ～やるじゃない。堅物な桜とは思えないくらい」
「んむっ、じゅず……ふふ、夜伽も運動の一種。愛華ネエにも負けはしない」
「っ……か、カナ、カナだって……！」
一人残された控えめな姉は、焦った様子で弟の背後に跪いた。
どうする気なのかと肩越しに見やると、彼女は少年のお尻に手を伸ばし――そっと割れ

目を左右に開くと、その奥にちゅっ、と口付けをした。
「ひあっ⁉　かか、加奈子姉さん、そこはっ！」
「ちゅぴっ、ちゅぷぴっ……っはぁ、いいの。カナ、おっぱい大きくないし愛華ネエみたく大胆じゃないから……こんなことしかできないから……」
切なげに瞳を潤ませながら、加奈子は後孔に可憐なキスを振り撒いていった。
はっきりいって愛華よりも大胆に思える。お尻の孔にキスするなんて普通はフェラより抵抗があるだろう。けれど彼女は、持ち前の献身さと一途さを発揮し、肛門にある小さなシワの一つ一つにまで柔らかな唇を押し当ててくれる。
「ちゅ、くちゅ、んむっ……はぁ、はぁ、ヒロくん、どう？　少しでも、感じてくれる？」
「うん、感じるっ……ああすごい感じるからぁ……！」
自信なさげな質問だったが返事にうそはない。元々繊細な肛門神経は初めてのキスに震えたものの、暖かく湿った唇の感触に不思議と愉悦を覚えてしまった。
その上唇がゆっくりと開き、唾液たっぷりの熱い舌が恐る恐る進入してくる。ねっとりとした柔らかい熱肉が優しく肛門を割る感覚に、少年の尾てい骨は寒気に近い快感を覚えてしまっていた。
「ひっ、ひいっ？　んぉお……加奈子姉さん、そんな、汚いとこ舐めなくたってぇ……！」
「はぁ……平気だもん。ヒロくんだって、お姉ちゃんのアソコ、優しく舐めてくれたもん。それにお姉ちゃん、ヒロくんにはいっぱい気持ちよくなってもらいたいから……」

本当は恥ずかしくて仕方ないのは真っ赤な頬を見れば分かる。それでも少年が心配すると、加奈子はニコッと微笑んでみせた。
「ヒロくん、大好き。愛してる。お姉ちゃん、もっともっとお嫁さんするから。旦那さまにもっともっと尽くすから……」
そういうと加奈子は、どこか陶酔の眼差しを浮かべて再び肛門に口付けた。次いで舌をぬるりと押し込み、繊細な粘膜の奥の奥までほじるように小刻みに舐める。
途端に背筋に電流が駆け抜け少年はおうっ！ と呻いてしまう。それを見た愛華と桜子も、思わぬ伏兵が現れたとばかりに各々愛撫を激しくしていった。
「やるじゃない加奈子、まさかアナル舐めるなんて。でも……んっ、れるれるっ……負けないわよ、本妻はわたしなんだから。あん、一番気持ちよくできるんだから……っ！」
「だめっ、ヒロ、わたしを、わたしを見てっ！ わたしの乳を愛してほしいっ……！ もっと、もっと感じてほしいっ……はむっ、じゅるるるずずっ！」
「あっ、あああ姉さんたちいっ！」
カリを一層激しくしゃぶられて弘行は堪らず仰け反っていた。一番弱い皮膚への刺激はやっぱり強烈に気持ちよくて、腰に渦巻いた快感の熱が一気に噴出しそうになったのだ。
すんでのところでそれをこらえるも、我慢されたのが面白くないのか桜子のパイズリがピッチを上げる。お餅のような柔らか乳房でたぷんたぷんとサオをこね回し、はしたないほど伸ばした唇でエラを熱烈にしごいてみせた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!